鳥取県米子市 YONAGOJYŌSEKI

# 米子城跡 22 遺跡

1998.3

建 設 省 倉 吉 工 事 事 務 所 財団法人 米子市教育文化事業団

# 例 言

- 1 本書は鳥取県米子市加茂町2丁目地内において実施した国道9号線米子地区電線共同溝建設工事に伴う米子 城跡22次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は建設省の委託を受けて(財)米子市教育文化事業団が実施した。
- 3 調査は(財)米子市教育文化事業団調査員 佐伯純也、米子市教育委員会 下高瑞哉が担当した。
- 4 本書に用いた方位は第1図が磁北である以外は全て座標北(G, N)を示し、標高は標準海抜高度である。 座標値は国土座標第V系を用いた。
- 5 第1図は米子・境港都市計画計画図27 (米子市)を複写、縮小し、加筆したものである。
- 6 遺物の番号は本文、図、表、写真とも対応している。
- 7 本書は佐伯が執筆、編集した。
- 8 出土遺物、実測図、写真は米子市教育委員会が保管している。
- 9 現地調査及び報告書の作成にあたっては下記の方々にご教示・ご協力を頂いた。記して感謝いたします。 村上勇、湯村功、中森祥、濱田竜彦、浜隆造。(敬称略)

# 本文目次

# 挿図目次

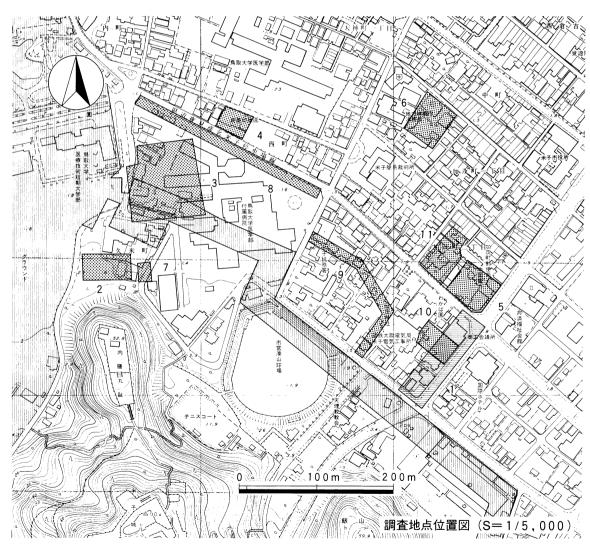
1	調査の概要・・・・・・・・・・・1	第1図	調査地点位置図・・・・・・・・・1
2	位置と環境・・・・・・・・・・・1	第2図	トレンチ配置図・・・・・・・・・ 2
3	米子城小史・・・・・・・・・・・2	第3図	1トレンチ出土遺物・・・・・・・・3
4	1トレンチの調査・・・・・・・・・3	第4図	3トレンチ断面図・・・・・・・・4
5	2トレンチの調査・・・・・・・・・3	第5図	3トレンチ出土遺物・・・・・・・5
6	3トレンチの調査・・・・・・・・・3	第6図	4トレンチ平・断面図・・・・・ 7~8
7	4 トレンチの調査・・・・・・・・・ 6	第7図	4トレンチ出土遺物・・・・・・・・ 9
8	5 トレンチの調査・・・・・・・・・ 1 1	第8図	4トレンチ出土遺物・・・・・・・1 (
9	まとめ・・・・・・・・・・12	第9図	5トレンチ平・断面図・・・・・・11
10	土師器皿観察表・・・・・・・・・12		
11	陶磁器観察表・・・・・・・・・・13		
12	土器・陶磁器集計表・・・・・・・14		

#### 1 調査の概要

米子城跡22遺跡は、建設省が実施する国道9号線米子地区電線共同溝の建設工事に先立って平成9年度に発掘調査された遺跡である。調査は建設省の委託を受けて、米子市教育委員会の協力のもとに財団法人米子市教育文化事業団が実施した。調査地は、加茂町2丁目地内に所在し、調査面積は130㎡を対象とした。調査にあたっては、調査区を5つのトレンチに分け、1トレンチより順次調査を行った。発掘調査は、現地作業に平成9年11月10日から12月29日までの期間を要し、整理作業は平成10年3月31日に終了した。

#### 2 位置と環境

米子城跡は、鳥取県米子市の市街地一帯に所在する近世の城郭遺跡である。城跡は、防衛の拠点であり行政区でもある内郭と、武士の生活域である外郭に分けられ、近世山陰道に沿う形で作られた町人街と、寺院を一直線に配置した寺町に区分される。このうち、現在までに発掘調査が行われているのがほぼ外郭区域に限られ、その他の区域の実態についてはよく分かっていない。遺跡の現況は、内郭は建物などが明治初期に解体され、現在は石垣を残すのみとなっている。一方、外郭は市街化が進み、近世米子城の面影は、道路割りなどにわずかにみとめられるにすぎない。



第1図 調査地及び周辺遺跡分布図

- 1. 米子城跡22遺跡
- 2. 久米第一遺跡
- 3. 米子城跡 1 遺跡

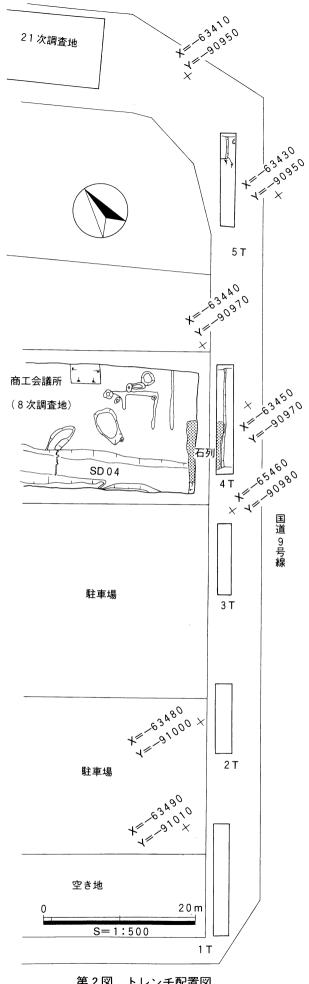
- 4. 米子城跡2遺跡
- 5. 米子城跡 3遺跡
- 6. 米子城跡 4 遺跡 9. 米子城跡 7 遺跡

- 7. 米子城跡 5 遺跡 10. 米子城跡 8 遺跡
- 8. 米子城跡 6 遺跡
- 11. 米子城跡 9 遺跡

#### 米子城小史 3

米子城は、1467年頃に山名宗幸が米子飯 山に砦を築いたのが始まりとされる。このころ 米子は伯耆・出雲両国の国境に位置し、軍事上 の要衝として重視されていたため、しばしば山 名、尼子両氏の戦いの場となっていた。159 1年には西伯耆・東出雲・隠岐12万石を領有 した吉川広家によって湊山に築城が始められ、 1600年には伯耆18万石の領主として中村 一忠が入城したが、その頃はまだ米子城は完成 しておらず、しばらくは尾高城に滞在したとい う。その後、中村氏が断絶すると、1610年 加藤貞泰、1617年池田由之を経て、163 2年より池田家家老、荒尾氏による自分手政治 が行われ、以後1869年まで続いた。明治維 新後、城の土地建物は士族に払い下げられた後 に売却され、天主閣などは明治10年頃までに 解体された。また江戸時代の武家屋敷は小原家 の長屋門が米子城二の丸に移築、保存されてい るのみで、ほかは全く現存していない。

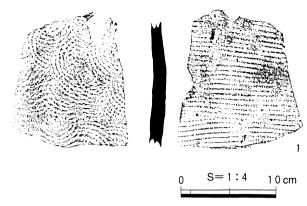
調査地は、享保5年(1720年)に作られ た絵図から、城への主幹道路と臼井金エ門、伊 木小治郎屋敷の境界にあたるものと考えられた。 安永・天明年間(1772~88年)の絵図で は、臼井家から国田家に変わり、安政年間(1 854~59年)の絵図では伊木家の地点が空 き地となり、明治3年(1870年)には山本 家の敷地となっている。明治中頃以降は、調査 地一帯は水田となっていた。このうち、8次調 査では、臼井・伊木両家の屋敷境界とみられる 水路跡と、山本家の拡張に伴う整地土層と石列 を確認しており、絵図の記述を裏付けている。



第2図 トレンチ配置図

#### 4 1トレンチの調査

このトレンチは、長さ15m、幅約2.2mの 範囲に設定し、深さ約2mまで調査したが、近 現代の撹乱により、遺構は全て失われていた。 遺物は、下層の黒色土中から須恵器の甕体部片 (第3図、1)が1点のみ出土している。



第3図 1トレンチ出土遺物

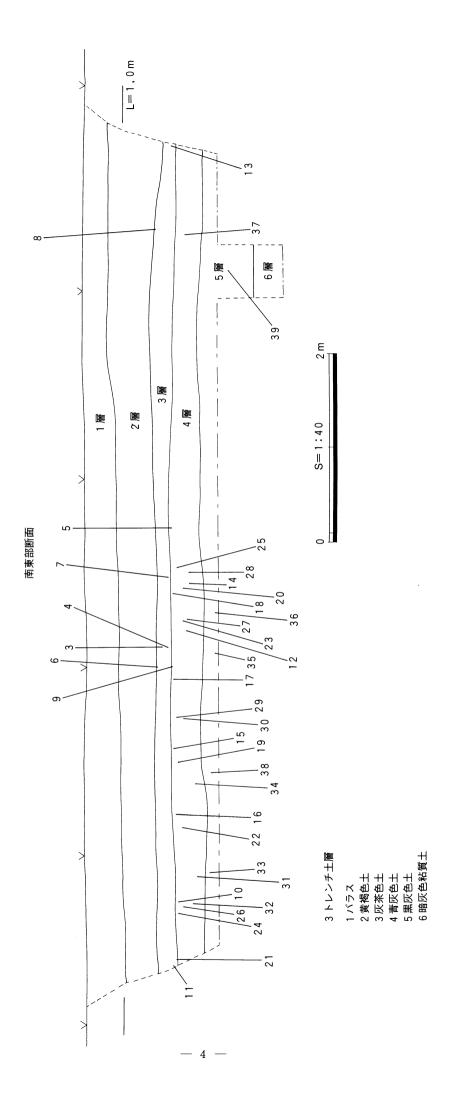
## 5 2トレンチの調査

調査地は、旧米子水道局の跡地にあたる。トレンチは、長さ9.5 m、幅2.2 mの範囲に設定した。深さ約2 mまでを調査したが、水道局建物の建設、解体時の撹乱により、遺構は全て失われていた。遺物は撹乱土中から陶磁器片を5点採集した。

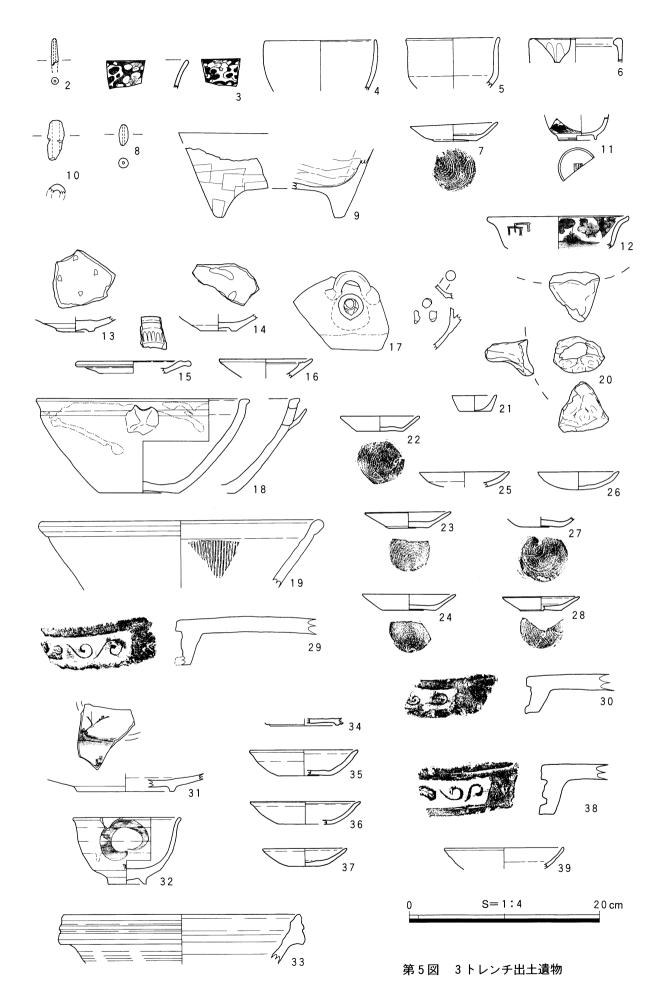
## 6 3トレンチの調査 (第4図)

長さ9.7 m、幅1.9 mのトレンチを設定した。調査は、安全性を考慮して、現地表面から深さ約1.4 mまでに止め、それ以下は断割を行い、土層の堆積状況を確認した。基本層序は6層に分かれ、1・2層は、明治から現代に属し、3層以下が近世から明治初期までの堆積である。6層からは遺物が出土せず時期を特定できなかった。遺物の取り上げは、3・4・5層の掘り下げ中に、深度別に3段階に分けて行った。遺物を検討した結果、これらの層の年代は、3層が幕末から明治初期に、4層が18世紀後半から幕末に、5層が16世紀後半から17世紀前半に相当するものと思われる。この地点は、安永・天明年間(1772~88年)に作られた絵図(『新修米子市史・第12巻』を参照)から、伊木家屋敷の東南部角に当たり、南東部に位置する道路との区画、及び南側の国田家との境界が接地するものと考えられたが、それらに関わる遺構は検出できなかった。

出土遺物(第5図) 土錘(2、8、10) 全て手づくね整形による。8は長さ2.2cm、直径1cmを計る。 火鉢(9) 土師質で平面は方形を呈する。口縁は脚から斜め上方に伸びる。 小杯(21) 口径5.3cm、器高2.4cmの土師質土器。口縁の内外面とも煤が付着する。灯火 具か。 取っ手状土製品(20) 土師質鍋の取っ手か、火鉢の脚の可能性も考えられる。下面に指押さえの跡を明瞭に残す。 軒平瓦(29、30、38) 29、30は第4層から、38は第5層から出土している。いずれも中心文様から2反転する唐草を配する。



第4図 3トレンチ土層図



**—** 5 **—** 

#### 7 4トレンチの調査

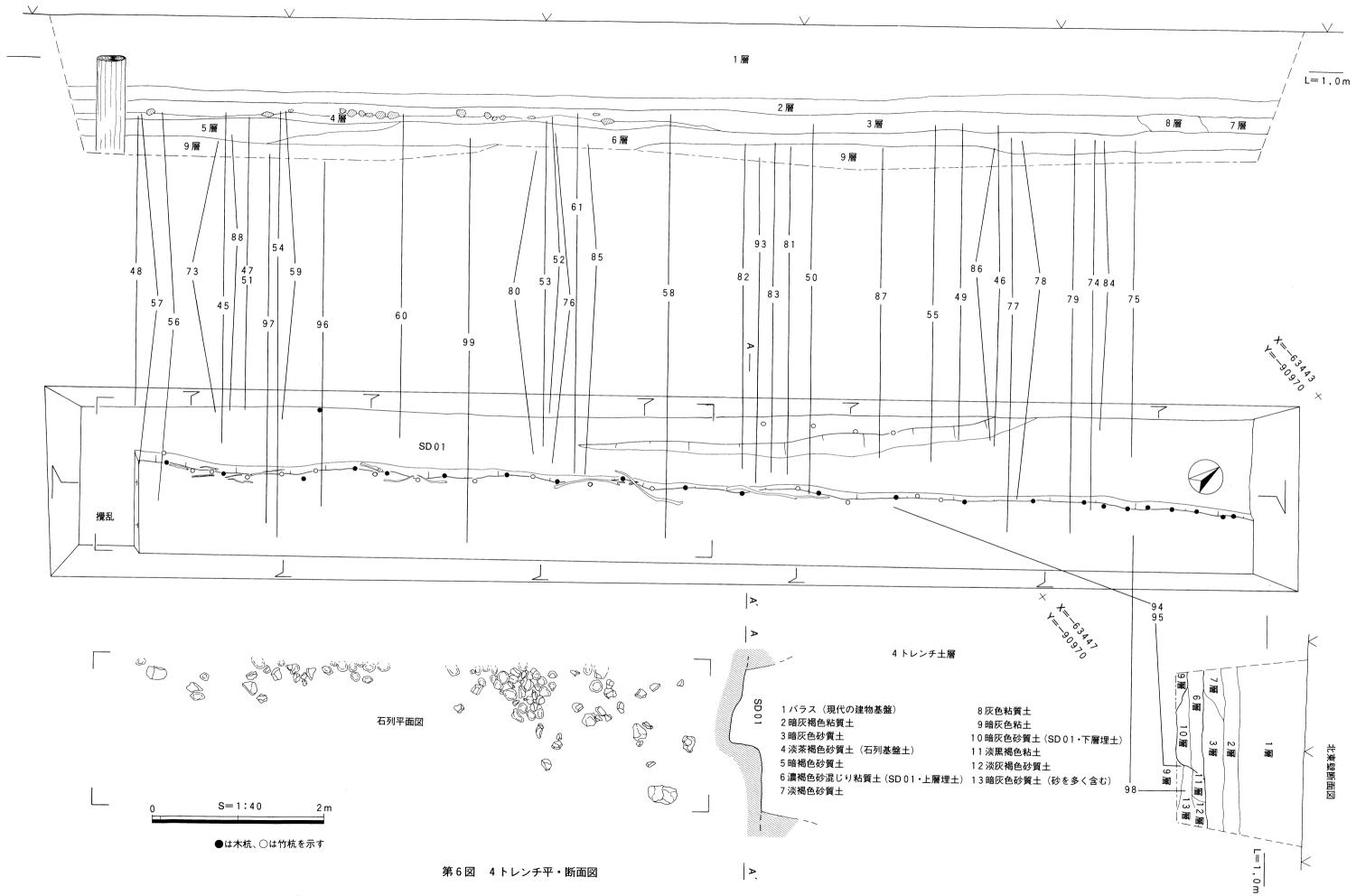
8次調査区域に隣接する地区である。トレンチは長さ14.6 m、幅2.2 mに設定した。土層は、1・2層が近現代、3層が幕末から明治、4層が18世紀~幕末、11~13層は17世紀代の堆積である。遺構は石列と、その下層から北東-南西方向に伸びる溝を検出した。遺物は埋土、溝中より土器、陶磁器、木器、漆器椀、金属製品などが多数出土している

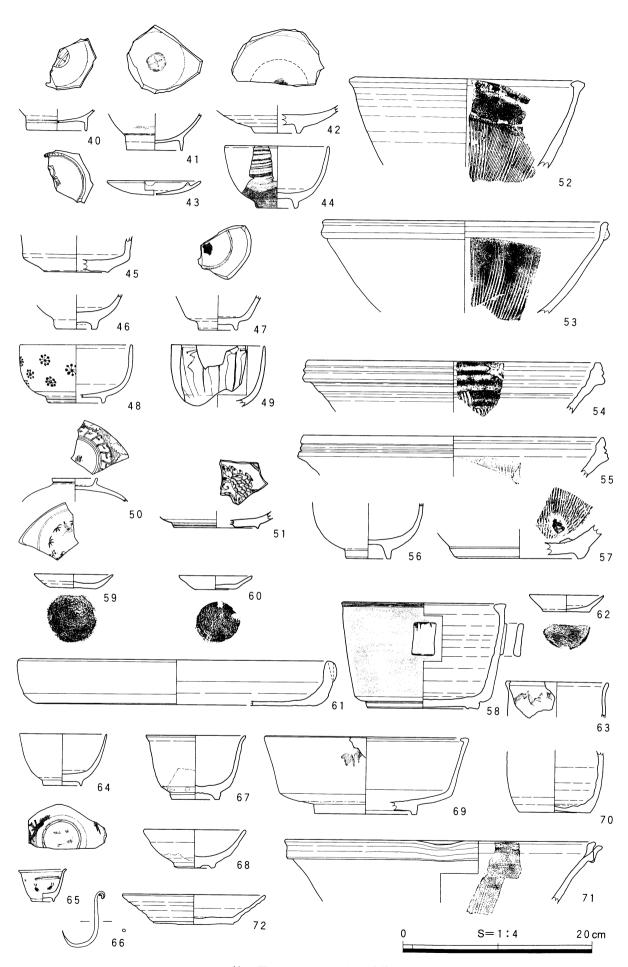
#### 検出遺構 (第6図)

石列 一部撹乱されているが、トレンチの南西端部で、長さ5m、幅0.6mにわたって検出した。石の配列や検出高からみて、8次調査で検出された石列と同一のものであろう。用途は、塀の土台の根堅め石と考えられるが、幅が4mにもなるため、建物の基礎である可能性も考えられる。石は人頭台から拳大の大きさの円礫が用いられている。時期は、石列検出面で出土した土器から幕末・明治前期のものと考えられる。

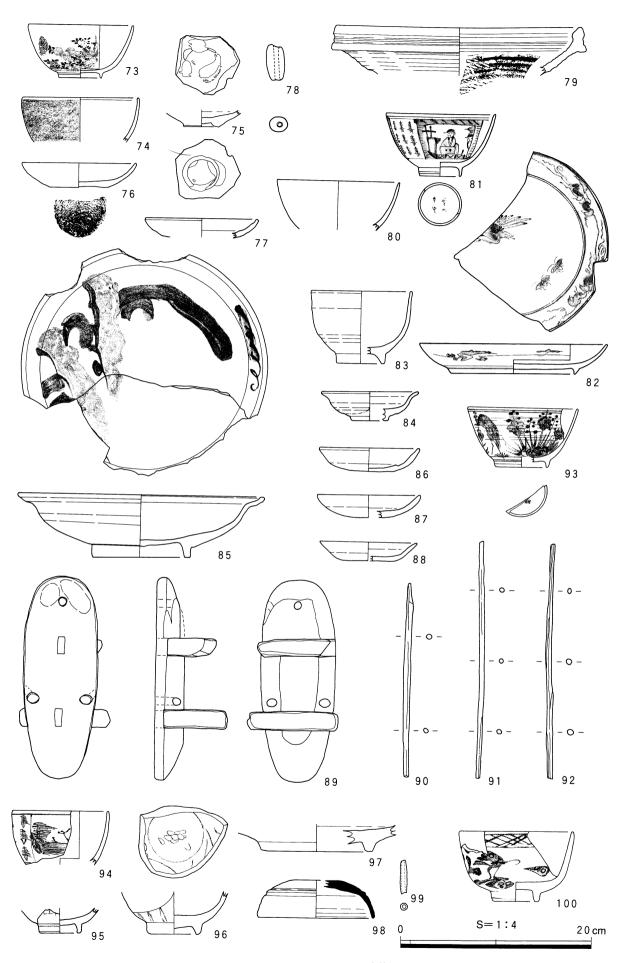
**溝**(SD01) トレンチの北西半分で約13mにわたって検出した。遺構は17世紀の堆積層を堀込んで作られ、深さは約30cm程度である。幅は北側の肩が未検出のため不明だが、8次調査ではこの溝は検出されておらず、1.2mから3m以内と考えられる。南東側の肩部には横木がわたされ、それを固定するための杭が打ち込まれていた。また杭には竹杭も含まれていた。このような状況は8次調査で検出された水路でも確認されており、護岸を目的として行われたものである。遺物は、溝下層より磁器の碗を一点(93)と、上層より多数の土器、陶磁器、木器を検出している。また(85)が8次調査で出土した大皿(『米子城跡8』図28-242、18世紀中頃~幕末の整地土層出土)と接合したため、これらの遺物は、整地が行われた際に溝中に一括して投棄されたものと考えられる。溝とその検出面から出土している遺物は、19世紀以降のものを含んでいないことから、整地は19世紀初頭には完了していたものであろう。以上のことから、この溝は17世紀以降に作られ、18世紀末頃に埋没したものと思われる。

出土遺物(第7図、第8図) 釣針(66) かえりのない釣針である。同型式のものが8次調査でも出土している。かえしを丸く加工するが、末端が線状に伸びる。銅製か。 土錘(78、99) どちらも手ずくねによる。78は全長3.9cm直径1.8cm。99は全長3.5cm、直径0.8cmを計る。 下駄(89) 6次、8次調査で同型式のものが出土している。組み合わせ式で、台と歯は別の材を使用する。平面は楕円形で、一部表面に黒い塗料を塗った痕跡が認められる。歯は台形になるが、歯先の摩滅が前後の歯で均一ではない。恐らく、ある程度すり減った状態で、前後の歯を付け替えているのであろう。 箸(90、91、92) 90は20.7cm、91は25.3cm、92は25cmを計る。





第7図 4トレンチ出土遺物



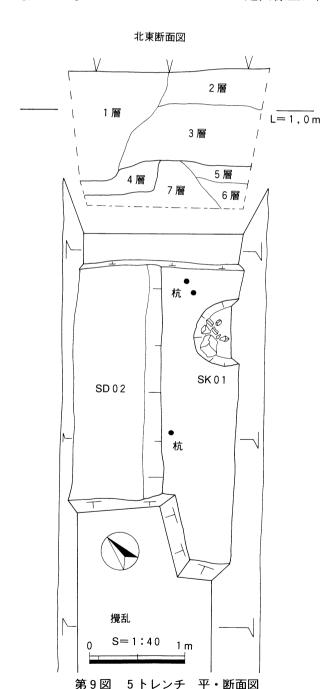
第8図 4トレンチ出土遺物

#### 8 5トレンチの調査 (第9図)

今回の調査範囲の最も北側に位置する、旧商工会議所建物の跡地である。トレンチは長さ12.6 m、幅約2 mに設定した。基本層序は3 層に分かれ、遺構は3 層以下の、粘質土を堀込んで作られている。遺構はトレンチの北部で溝(SD02)と土坑(SK01)を検出した。またトレンチの北部3 mより南側は、撹乱により遺構が失われていた。

#### 検出遺構

**溝**(SD02) 第3層の直下で長さ2.5 m、幅約1 mにわたって検出した。溝の全幅は北側の肩が調査区外にのびるため検出できていない。深さは約30 c mで埋土からの遺物の出土はなかった。4 トレンチのSD01の延長線上に位置することから、これと同一の溝であろう。



土坑(SK01) 全形は大半が調査区外にかかるため知り得ないが、直径約75cm、深さ30cmの円形土坑か。SD02と同一遺構面で検出した。土器は出土しなかったが、上層に一辺5cmから20cmほどの角礫が含まれていた。遺構の時期、性格とも不明である。

出土遺物 表土掘削中に陶磁器片 5 点、土器 片 1 点を採集したに止まった。いずれも撹乱土 中からの出土である。また撹乱土の下層から、 昭和 4 9 年発行の 1 0 円玉を検出しており、こ の撹乱は、それ以降に行われたものと考えられ る。

#### 5トレンチ土層

- 1 攪乱
- 2 バラス (現代の建物基盤)
- 3 暗灰色シルト (明治期の水田耕作土)
- 4 暗黒褐色粘質土 (SD 02・埋土)
- 6 黒灰色粘質土
- 7 淡黑灰色砂質土

#### 9 まとめ

屋敷境界と溝 今回の調査では、石列と、道路と屋敷の境界を示すと思われる溝(SD01・02)を検出した。石列は8次調査で検出されていたものと同一のもので、塀の根石と仮定すれば、幕末期の屋敷の南東部境界線がほぼ確定したことになる。しかしながら、根石をそなえるような重厚な塀は一般武士の住居には不自然であるため、7次調査で確認されたような建物の基礎石とする考えが妥当ではないかと考えられる。石列の下層で検出された溝(SD01)は、屋敷と道路の境界を示すものと思われ、このような境界の設定は米子城跡7・8・9次調査でも確認されており、屋敷境界の設定にあたって一般的に行われていたものであろう。このように屋敷地の周囲に溝が巡るのは、元来米子城下一帯が低湿な地域に立地しているためで、効率良く排水を行うためにも、溝の掘削が不可欠であったためと推察される。また、今回検出した溝を、道路の側溝として考えた場合、現国道9号線の道路側溝よりも、5mほど北西側に寄っており、現在の地割よりも北にずれる可能性が高く、現行の道路の幅や規模に関しては、近世の地割をそのまま踏襲しているとは考えにくくなる。しかし、この水路の南東部に、さらに道路と屋敷を区画する施設が存在する可能性もあり、即断は出来ない。ただし、8次調査で検出された水路(SD04)は、今回検出された溝(SD01)よりも南東側に伸びる可能性は少なく、18世紀中頃までの屋敷地の範囲はこれ以上は大きくならないものと思われる。また現行の道路境界が近世の地割とずれることは、溝の埋没後、その直上に基礎石を用いるような施設が築かれていることも一つの傍証となろう。

# 参考文献

『新修米子市史・第12巻』	米子市史編さん協議会	1997年
『伯耆米子城』	佐々木謙	1971年
『米子城跡6遺跡』	(財) 鳥取県教育文化財団	1996年
『米子城跡7遺跡』	(財) 米子市教育文化事業団	1996年
『米子城跡8遺跡』	(財) 米子市教育文化事業団	1996年
『米子城跡 9 遺跡』	(財) 米子市教育文化事業団	1997年

米子城跡 2 2 遺跡 出土 土師器皿 観察表

番号	出土地点	法量 (cm)			胎土	色調	焼成	底部糸切り痕	備考
田々		口径	底径	器高	ᄱᅩ		79474	成而 <b>小</b> 男 7 版	уна "У
7	3トレ3層	9.3	4.5	2.0	密	淡灰褐色	良好	有	内面に一部煤付着
2 2	3トレ4層	8.2	5.0	1.6	密	淡褐色	良好	有	
2 3	3トレ4層	9.0	4.0	1.7	密	淡褐色	良好	有	
2 4	3トレ4層	9.8	5.5	1.7	密	灰褐色	良好	有	口縁部に煤付着
2 5	3トレ4層	9.6		1.7	密	淡褐色	良好	無	
2 6	3トレ4層	8.6		1.9	密	淡褐色	良好	無	
2 7	3トレ4層		5.0	1.1	密	褐色	良好	有	
2 8	3トレ4層	8.2	4.5	1.5	密	褐色	良好	有	口縁部に煤付着
3 5	3トレ5層	11.4	5.4	2.7	密	淡褐色	良好	無	内面に一部煤付着
3 6	3トレ5層	11.6	5.0	2.4	密	淡褐色	良好	無	
3 7	3トレ5層	8.9	3.0	1.9	密	淡褐色	良好	無	
5 9	4トレ3層	8.4	4.8	1.6	密	淡灰褐色	良好	有	口縁部に煤付着
6.0	3層	7.6	4.4	1.2	密	淡褐色	良好	有	口縁部に煤付着
6 2	石列	7.8	4.9	1.8	密	淡灰褐色	良好	有	口縁部に煤付着
7 2	4 層	14.8	8.2	3.2	密	淡褐色	良好	有	
7 6	溝検出面	12.0	6.3	2.6	密	淡灰褐色	良好	有	
7 7	溝検出面	11.8	_	2.0	密	淡褐色	良好	不明	口縁部に煤付着
8 6	溝埋土	10.3	_	2.6	密	淡褐色	良好	無	外面スリップ技法
8 7	溝埋土	10.5		2.4	密	暗灰色	良好	無	風化著しく、器壁剝離している。
8 8	溝埋土	10.4	_	2.0	密	淡褐色	良好 _	無	

米子城 2 2 遺跡 出土陶磁器 観察表

番号	種別	器種		量(cm		出土地点	備考	時期
<del>- ,  </del>	須恵器		口径	底径	器高	1トレ黒色土	甕体部か。外面に緑灰色の釉がかかる。	不明
1		 小鉢					肥前系。多角形の小鉢。内外面とも花文を描く。	V~
3	磁器						だ削木。多月がり小鉢。内外面とも化文を強く。 在地系。光沢のある淡緑灰色を呈する。胎土は灰色。	V
4	陶器	碗		_	11.5	3層		Ш
5	陶器	碗	9.6			3層	肥前、京焼風陶器。口縁部ややくびれて外方へ伸びる。	V~
6	陶器	不明	9.0			3層	在地系。外面はへら彫りし黒褐色の釉を掛ける。	
11	磁器	碗		3.8		4層	肥前系。湯飲みか。高台内に銘有り。	IV V
12	磁器	<u> </u>	14.8			4層	肥前系。周縁、外面に源氏香文、内面に梅を描く。	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
13	陶器			4.0		4層	唐津。内面暗灰色。胎土目積み。	I
14	陶器			3.8		4層	唐津。内面灰色。砂目積み。	II
15	陶器		11.6		_	4層	瀬戸・美濃系。折縁皿。胎土はやや黄色がかる。	I
16	陶器	油受皿	9.6	_	_	4 層	在地系。灯明受け皿。内面は濃茶色の釉を掛ける。胎土は赤褐色。	V ∼
17	陶器	土瓶				4層	在地系。外面上半は緑黒色、下半分は淡茶色。内面は白褐色を呈する。	V~
18	陶器	片口	22.2	8.6	10.0	4 層	唐津。外面下半部削り痕を残す。内面は波縁褐色の釉が掛かる。	II
19	陶器	擂鉢	29.2	_		4 層	在地系。釉は濃褐色で光沢がある。	V ~
31	磁器			10.3		5層	肥前系。高台畳付に砂が少量付着。胎土は灰色を呈する。	II
32	陶器	碗	11.2	3.8	7.1	5層	唐津。外面に鉄釉で丸を描く。	I
33	陶器	擂鉢	24.5	_		5 層	備前系。口縁外面に2条の凹線がめぐる。	I
34	陶器	Ш		6.8		5層		I
39	陶器	Ш	12.6	_		たちわり	朝鮮系、李朝。内外面とも光沢ある暗緑色を呈する。口縁部煤付着。	I
40	磁器	碗	_	6.2		4トレ1・2層	肥前系。広東碗。見込みと高台内に銘有り。	V
41	磁器	碗	_	6.0	_	1・2層	肥前系。広東碗。見込みに十字文を描く。	V
42	磁器	<u>III.</u>		_	_	1・2層	肥前系。見込みを蛇の目釉剝ぎし、コンニャク印判による五弁花文を押す。	$IV \sim V$
43	陶器	油受皿	9.6	_		1・2層	在地か?。灯明受け皿。無釉。全体に赤みを帯びる。	V ∼
44	陶器	碗	10.8	4.0	6.6	1・2層	唐津。刷毛目碗。胎土は赤みがかった黒色。	IV
45	磁器	香炉	_	6.8	_	3層	肥前系。蛇の目凹形高台銹釉塗り。内面は赤く発色する。	III
46	磁器	碗		4.3	· —	3層	国産青磁。透明感のある青緑色を呈する。高台部砂付着。	V
47	磁器	碗	_	_		3層	肥前系。外青磁。見込みにコンニャク印判による五弁花文。	IV
48	磁器	蓋物碗	11.8	5.8	6.2	3層	肥前系。口縁部内面釉剝ぎ、外面に梅花文を散らす。	IV
49	磁器	碗	9.9	_	_	3層	肥前系。線区画の中に文様を描く。	III
50	磁器	蓋	_	4.8		3層	肥前系。つまみ上面に記号あり。外面に花と蓮弁文、内面に松竹梅を描く。	V
51	磁器		_	9.0	_	3層	肥前系。蛇の目凹形高台。内面に花?を描く。	IV~
52	陶器	擂鉢	23.4	_	_	3層	産地不明。口縁部は「T」字に肥厚する。胎土は赤く石英を含む。	不明
53	陶器	擂鉢	28.5			3層	須佐唐津。口縁に突帯を張り付ける。内外面赤褐色。卸目は著しく摩滅。	V
54	陶器	擂鉢	30.0		_	3層	備前系。口縁部に2条の凹線がめぐる。口縁部は黒く発色。	I
55	陶器	擂鉢	31.4		_	3層	備前系。口縁部に2条の凹線がめぐる。口縁部は茶色に発色。	I
56	陶器	碗	_	4.0		3層	在地系。緑がかった黄色を呈し、貫入が見られる。高台畳付に少量の砂が付着。	V~
57	陶器	擂鉢	_	12.8	_	3層	在地系。内外面赤褐色。胎土は赤みを帯びた白茶色。高台を有する。	V~
58	陶器	不明	16.2		11.6	3層	在地系。内面、高台内無釉。外面は淡白色の釉を掛ける。	V ~
63	陶器	碗	10.5	_	_	石列	肥前、京焼風陶器。	Ш
64	磁器	碗	9.1		5.5	4層		IV
65	磁器	小杯	4.9		3.5	4層		$IV \sim V$
67	陶器	碗	10.4		6.8	4層		I
	陶器	1999	10.4		4.1		唐津。 釉は淡い灰色を呈する。 ・ 一方では淡い灰色を呈する。	I
69	陶器	鉢		10.6	8.2		在地系。外面に山水文?を描く。	V ~
70	陶器	瓶	13.0	7.4		4層	産地不明。外面暗茶褐色を呈する。	不明
70	陶器	擂鉢	32.4			4 層		II
73			11.0	4.4	4.6		店件。 口移可鉄州野り。   肥前系。外面に草花文を描く。	IV
	磁器 磁器	碗碗	12.2	4.4	4.6	<b>海快</b> 山山 <b>海検出面</b>	肥前系。外面鉄釉。	IV~
74				-			肥削末。クト囲鉄柵。   唐津。釉は灰色。高台部無釉。砂目有り。高台は糸切り後内面削り出し。	II
75	陶器	煙針	— 25. 4	3.2		溝検出面	唐津。相は灰色。高台部無相。砂日有り。高台は赤切り夜内山削り出し。   備前系。口縁部に2条の凹線をめぐらす。	I
79	陶器	擂鉢	25.4			溝検出面		不明
80	磁器	碗	12.9			溝上層	肥前系?。内外面とも無文。	
81	磁器	碗	11.5		6.8		高台内に「宣明年製」の銘有り。区画内に舟上の二唐人と文様化した寿を描く。	III
82	磁器	III.	19.8	+	3.2		肥前系。内面に鳥と昆虫を描く。周縁に墨弾きによる紋様有り。高台内針支。	IV
83	陶器	碗	10.7	5.0	7.7		肥前、京焼風陶器。17c後半~18c初頭。	TT
84	陶器	Ш	10.0	3.0	3.1		唐津。口縁部は外反する。釉は緑がかった灰色。高台部無釉。	II
85	陶器	<u> </u>	25.4		6.7	溝上層 滞工屋	肥前系。内面に松を描く。(8次調査、28図242と接合)	不明
93	磁器	碗	11.6	5.4	6.3		驚と草花を描く。高台内に「明」の字有り。	不明
94	磁器	碗	10.1	<u> </u>		11~13層	肥前系。線区画の中に風景と文様化した寿を描く。内面に釉だまり。	IV
95	磁器	碗		4.2		11~13層	肥前系。畳付は赤く発色し、僅かに砂が付着。	Ш
96	磁器	碗		5.2		11~13層	中国、龍泉窯系。青磁蓮弁文碗T4c末~15c前半。	TT 0
97	磁器	Ш		10.8		11~13層	産地不明。陶胎染付。	II ?
_ 98	須恵器 磁器	坏蓋	11.2		4	11~13層 たちわり	TK43、陰田IVに相当する。6世紀中葉。 陶胎。口縁部に四方襷文、体部に樹木を描く。	IV
100		碗	11.8	4.8	7.4			

I 期・・・16世紀後半~17世紀初頭

Ⅳ期···17世紀後半~18世紀後半

II 期・・・17世紀前半

V期・・・18世紀後半~幕末

Ⅲ期・・・17世紀半ば~17世紀後半

VI期・・・幕末〜明治

米子城跡22遺跡出土陶磁器集計表

地区	磁器	陶器	土器	合計
1トレンチ	0	0	0	0
2トレンチ	1	1	3	5
3トレンチ	8 4	1 8 9	1 3 8	4 1 1
4トレンチ	1 5 5	183	1 1 7	4 5 5
5トレンチ	4	1	1	6
出土地区不明	1 2	1 2	1 3	3 7
合 計	2 5 6	3 8 6	272	9 1 4

#### 3トレンチ出土陶磁器集計表

出土層位	磁器	陶器	土器	合計
1 • 2 層	3 3	6 4	2 1	1 1 8
3 層	2 3	4 7	2 6	9 6
4 層	2 6	6 4	6 7	1 5 7
5 層	2	1 2	2 2	3 6
たちわり	0	2	2	4
合 計	8 4	1 8 9	1 3 8	4 1 1

#### 4トレンチ出土陶磁器集計表

出土層位	磁器	陶器	土器	合計
1 • 2 層	5 3	7 0	2 7	1 5 0
3 層	3 1	4 5	2 7	1 0 3
石列上面	2 7	3 1	2 0	7 8
4 層	2 2	1 2	1 2	4 6
SD01検出	7	8	1 0	2 5
SD01埋土	5	8	9	2 2
1 1 ~ 1 3 層	5	2	6	1 3
たちわり	5	7	6	1 8
合 計	1 5 5	183	1 1 7	4 5 5

# 図 版



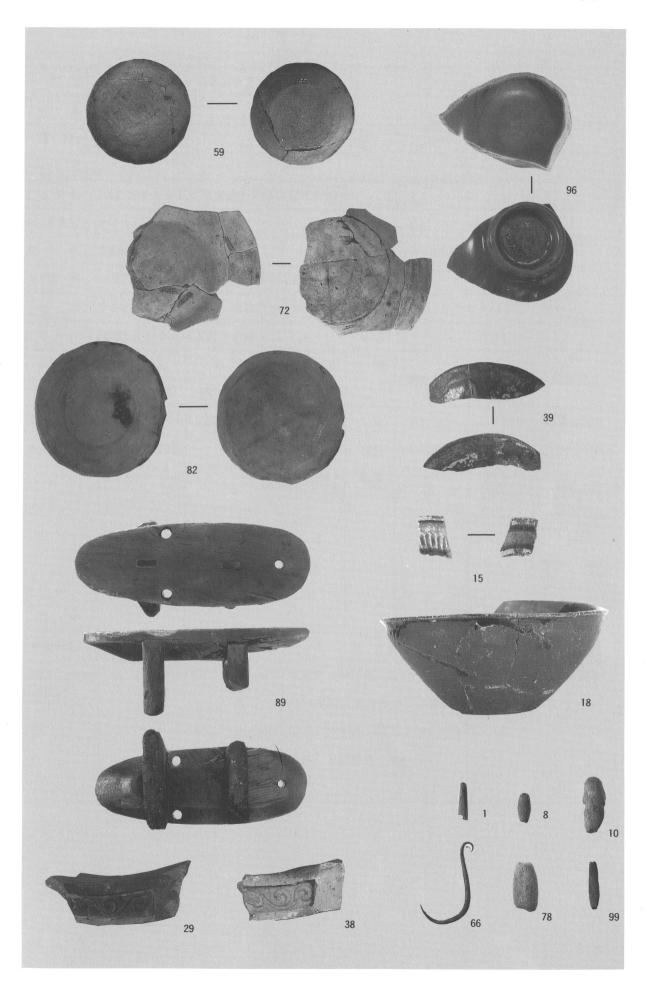
4 トレンチ 石列検出 (南東より)



4 トレンチ SD 01完掘 (南西より)



5トレンチ SD 02完掘 (南西より)



#### 報告書抄録

ふりがな	よなごじょうせき 2 2 いせき										
書 名	米子城跡22遺跡										
副書名											
巻 次											
シリーズ名	(財)米子市	(財) 米子市教育文化事業団発掘調査報告書									
シリーズ番号	2 7										
編著者名	佐伯純也,	下高瑞哉									
編集機関	財団法人	米子市教育	文化事業団	埋蔵文化	財調査室	1					
所 在 地	<b>∓</b> 683-	0 8 2 2	鳥取県米子	市中町2	0	TEL (08	59) 22-	7 2 0 9			
発行年月日	西暦 19	98年3月	3 1 目								
ふりがな	ふりがた	i I	— <b></b>	北緯	東 経		== <del> </del>	3m + 127 (C)			
所収遺跡名	所 在 地	地市町村	寸 遺跡番号	。,"	0, "	調査期間	調査面積	調査原因			
よなごじょうせき22いせ	きとっとりけんよれ	なごし 31202	2 719	35度	133度	19971110~	1 3 0 m²	建設省電線			
米子城跡 22遺蹟	跡 鳥取県米	子市		25分	19分	19981229		共同溝建設			
	かもちょう			27秒	55秒						
	加茂町										
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特 記 事 項				
米子城跡 22遺趾	姊 城 跡	江戸時代	土坑	陶磁器(伊万里、唐津、備前、			屋敷の範囲を示す溝を				
			溝	瀬戸美濃、須佐唐津、在地)、 検出							
			石列	土器、木製品(下駄、箸)、漆							
			:	器椀、金属	<b>属製品、</b> 須	<b>頁恵器</b>					
		L									

#### (財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書27

# 米子城跡 22 遺跡

1998年3月

編集•発行 財団法人米子市教育文化事業団

**〒**683-0822 鳥取県米子市中町20

印 刷 (有)米子プリント社